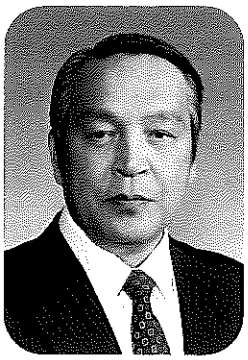
栃木県中学校長会報

第114号
発　行
平成25年２月８日
編　集
栃木県中学校長会広報部

今年度を振り返って



栃木県中学校長会長
宇都宮市立若松原中学校長
間　宮　栄　二

今年度も残すところ、あとわずかとなり、卒業や進級、次年度の学校経営計画作成に向けて、いよいよ学校教育の集大成のときです。今年度は、大震災の復旧・復興、原発事故対応、地震や竜巻等の自然災害・いじめ・体罰・中学生の就労問題などの対策や対応、そして想定外までも想定した危機管理の上での学校経営を、当たり前のようにたゆみなく果敢に実践され中学校教育を推進されている161名の会員の皆様の日々の努力に敬意を表し、改めて感謝いたします。このような中、ロンドンオリンピックや山中伸弥氏のノーベル賞受賞は、生徒に夢や希望を抱かせ、教育にも素晴らしい力となりました。

今年度の栃木県中学校長会の活動は、総会並びに研修会（５月）、理事研修会（５・７・11月）、研究大会（９月）、各専門部研修会、県教育長と校長会長との懇談会（５月）、県教委と小中学校長会との教育懇談会（８月）、県教委・県立高等学校長会との懇談会（10月）、関中新潟大会（６月）、全中大阪大会（10月）、理事・協議員研修会（２月）と例年どおり推進されています。

総会並びに研修会・関中新潟大会で那須地区校長会は「小・中連携による地域の特色を生かした学校経営」の発表を、県中研究大会で、芳賀地区校長会は「『確かな学力』を保証するためのわかる授業づくり」、足利地区校長会は「地域の教育力を生かした豊かな心を育てる取組」を発表しました。いずれも、地区校長会の組織を挙げて研究したもので、研究主題「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え、社会において自立的に生きる生徒を育てる中学校教育」に迫る素晴らしい発表でした。このように、平成22年度関中栃木大会後に作成した研究発表の地区割ローテーションも順調に機能し始めたようです。

県教育長、県教育委員会との懇談会では、「①現状を踏まえた教職員人材確保と教職員配置の改善②特別支援教育推進のための諸条件の整備③部活動の教育的意義の再認識と制度的諸問題の解決に向けた取り組みの強化」などについて、「教育現場の実情」と「教育行政の努力」の相互理解の必要性、その上での対策・対応について話し合いました。

県教委・県立高等学校との懇談会では、県立高等学校の入学者選抜の在り方、特に平成26年度から実施の特色選抜の問題点について、かなり踏み込んだ話し合いをしました。さらに、11月理事研修会において、改めて県教委に特色選抜の説明を要請し、地区会長への周知を図りました。

会費問題の解決のため、地区会長会などを臨時に行い組織的に理事研修会につなぎ、納得のいく解決の方向に見通しがつき、大変うれしく思いました。

会員の皆様におかれましては、今年度、中学校教育の振興を図るという本会目的達成のために協同していただきまして誠にありがとうございました。

事務局だより

今回は全日中や関地区の校長会と本県中学校長会のかかわりについて紹介いたします。

全日中理事会は年に４回開催され、本県から会長が参加し、文科省等、国の最新情報の提供を受けたり、各都道府県の教育事情を話し合ったりしています。その情報は本県中学校長会理事会において報告されます。

また、全日中の幹事として本県から３名の校長が定期的に東京に出向き、給与対策部・研究部・編集部の会合に参加し、国への要望活動、全日中の研究の推進、広報活動等に携わっています。

関地区理事会は年に３回開催され、本県から２名の理事が参加し、理事会来賓として招かれる全日中の会長または事務局長から、教育に関する国の動向等の説明を受けたり、関地区研究協議会の内容について協議したりします。

また、全日中総会以外に、役員研修会・全日中事務担当者会議・関地区事務局長会議等に本県から代表者が参加しています。

（事務局長　後藤　　明）

県教委との教育懇談会

広報部長　片　桐　　晃
（宇都宮市立旭中学校長）

平成24年８月９日㈮、宇都宮市内のホテルニューイタヤにおいて、「県教委と小・中学校長会との教育懇談会」が開催されました。

小学校長会19名、中学校17名で臨み、県教委側は瓦井千尋教育次長様はじめ23名の関係者に出席いただきました。小学校長会の高梨敏朗会長、瓦井千尋教育次長の挨拶の後、総務部長の半田　均 宇都宮市立陽東中学校長が提案事項を説明しました。

◎　中学校長会提案事項

１　現状を踏まえた教職員人材確保と教職員配置の改善

(1)　新学習指導要領実施による授業時数の増に対応できる教員の加配

(2)　少人数指導、指導法の工夫･改善等のための教員の加配維持

(3)　正式採用教員の確保（欠員補充の解消、臨時的任用教員経験者の採用、学校図書館司書教諭の専任化）

(4)　人事異動に関する校長の具申の尊重（小中規模校における配慮ある教職員異動）

２　特別支援教育推進のための諸条件の整備

(1)　特別支援学級担任の育成

(2)　発達障害のある生徒の指導のための人的措置と特別支援学級の設置要件の弾力化

(3)　知的障害を伴わない発達障害のある生徒の進学先の確保

３　部活動の教育的意義の再認識と制度的諸課題の解決に向けた取り組み強化

(1)　勤務時間外での部活動指導の現状把握と対応

(2)　部活動顧問への諸手当、地域スポーツ指導者派遣等、部活動充実のための基礎的条件の整備

４　その他

(1)　研修･出張旅費の確保と旅行命令に関する校長の裁量権の維持

(2)　新たな高齢雇用施策に伴う具体的制度の骨子等の早期提示

(3)　中体連・中文連への補助の継続

これらの提案事項に対して、県教委側からは各担当者が一つ一つの事柄について、本県の現状や展望を示しながら、今後も国への要望を鋭意努力していくことや財政の許す限り努力する旨回答があり、有意義な懇談会となった。

県教委・県立高等学校長会との懇談会

進路対策部長　野　村　公　子
（足利市立愛宕台中学校長）

平成24年10月11日㈭、とちぎ青少年センターにおいて県教委、県立高等学校長会と公立中学校長会（正副会長、進路対策部員が出席）との懇談会が開かれました。次のような要望・提案をしました。

１　一日体験学習について

(1)　メールによる申し込みができるようになって有難い。様式や返信メール等について、より使いやすい形に改善して欲しい。

(2)　当日の出欠確認を、生徒個別にして欲しい。

２　募集方法について

(1)　過年度生は、本人が出願するようにできないか。

(2)　出願日程について

・２日目の受付終了時刻を延長してほしい。

・フレックス選抜を一般の出願と同じ日程に。

・推薦入試の合格発表から一般入試の願書提出までの時間をもう少しとれないか。

３　その他の提案事項について

(1)　一般入試「合格者一覧」のメール配信について

・なるべく早く届くようにして欲しい。

・手続きを簡単にして欲しい。

(2)　受検料を振り込み可能にして欲しい。

(3)　「進路希望調査」のコンピュータ入力について。

４　入学者選抜の方法について

県教委から、26年度導入の「特色選抜」についての説明をしていただき、質疑応答に熱が入りました。

「特色選抜」は、これまでの経緯、各地区の実情、様々な考えを考慮しながら、慎重に制度設計を進めている段階であり、志願理由書の扱い等についても中学校側の意見も聞きたいとのお話がありました。

県教委、県立高校長会、公立中学校長会が、それぞれの役割を果たしながら、とちぎの子どものより良い成長を目指していけるよう、相互の意思を率直に交換できる機会としてこの会を発展させていきたいと考えます。

地区校長会だより

宇都宮地区中学校長会

宇都宮地区中学校長会は、公立中学校25校と宇都宮大学附属中学校１校を加えた26校で組織されている。今年度は、６名の校長が退職してその後任の新たなメンバーが加わっています。また、校長研修会等は隣の上三川町中学校長会と一緒に行われることが多く、お互いに協力しながら教育活動を進めている。

本年度は、学習指導要領の完全実施に当たり、学校長の最大の関心事は、「生きる力」を目指して知識・技能の徹底とそれらを活用した学習を通して育てる思考力、判断力、表現力の育成、そして学習の最も基本に当たる「自ら学ぶ意欲」を育てることができているかということである。細かい分析は理解していないが、本県の児童生徒の学力については、文部科学省が実施している本年度の学力調査の結果が公表されている。それらの結果から見ても、これらの学力育成が喫緊の課題になっている。本当に各学校の授業は、それらの学力を育成するのに耐えるものになっているのか？この課題について各学校が取り組んでいる。

また、本地区では、以前からいずれの中学校も小学校や高等学校との連携を大切にしながらこの地域の児童生徒を育成しようとしている。小学校とは、中学校入学前から必要な情報を交換したり、小・中を通して社会性など育てたい力を明確するなどして、児童の理解に向けた努力をしている。

高等学校とは中・高の連絡会を設置し、生徒の進路に関する問題だけでなく、授業や研究会等開催情報を共有し、それぞれの学校の教育を理解し、連携を深めながら教育を進めていくシステムができている。

そして校長会は、自らが学ぶ姿勢を大切にし、研修部を中心に日々これからの学校経営の在り方を模索している。関地区の研究会等でもそれらを提案していきたいと考えている。

［宇都宮市立星が丘中学校長　綱川　　浄］

栃木地区中学校長会

～13校は『和して同ぜず』～

本会は、旧栃木市・大平町・都賀町・藤岡町・西方町の合併により新生栃木市内の13校の校長で構成されています。

独特の歴史を有した市町の合併ですから、各校が実践する学校経営は、自ずと豊かな地域性を生かした新鮮で魅力的なものとなっています。

今年度は、定期研修会の度に２人ずつ、各々が自由テーマでレクチャーを行う『学び合いシリーズ』を始めました。内容は「脳梗塞」や「ラムサール条約」等、会員の個性が光るもので、毎回新たな発見と仲間意識の高まりを実感しています。

ところで、本会は県校長会と同じ「組織マネジメント」の研修を進めています。この度、第43次南極観測隊員だった脳外科医師から、『極地では何日も果てしない雪原を移動し、任務を遂行した。この得難い体験から「どんなにゴールが遠くとも一歩歩み始めれば、そこに辿り着く日が必ずやって来る」ということを学んだ。』という講話を聴きました。

すさまじい体験談のはずなのに、どこか我々の仕事に相通じるものを覚え、励まされました。同時に、中学校が抱えるものには「極地での任務」に匹敵する大きさ・深さ・尊さがあることを再認識し、同僚諸氏への敬意の念を一層深くした次第です。

［栃木市立大平中学校長　髙岩　初枝］

通称「ぞう山」を背景に、市内寺尾公民館にて

私の学校経営

「『想』をメインテーマに」

小山市立小山第二中学校長　中　島　聖　巳

本校は、小山市中央部に位置し、学級数14（普通11・特別支援３）、生徒数340名の中規模校である。生徒の学習意欲は高く、生活態度も明るく積極的である。また、保護者や地域住民は、学校教育への関心が高く、その期待度も大きいものがある。

「自学・誠心・剛健」の学校教育目標と、「知恵を出せ　汗を出せ　そして　鍛えよう」の合い言葉のもと、家庭や地域と手をつなぎながら、生徒の主体的活動や豊かな体験活動を推進し、潤いと感動のある学校づくりを目指している。

平成23年度に私が新任校長として赴任した際、教職員と生徒、保護者に提示した学校経営のメインテーマは「想」という言葉である。

作家の司馬遼太郎は、人が生きていく上では、助け合うということが大きな道徳であり、相手を真剣に想うことから生まれる、いたわりという感情が重要だと述べている。また、先の震災において、未曾有の災害に見舞われながらも、互いに相手を想って行動する姿が、大きく評価されたのも記憶に新しい。

私は、このような人としての在り方を学校経営の根底に据えたいと考えている。それこそが、学習指導要領の理念である「生きる力」を身に付けさせることに直結するものと確信している。

職員には打合せや職員会議、生徒には朝会の講話、保護者には学校だより等を通じて、繰り返し学校経営に対する思いを伝えてきた。また、各校務分掌を、可能な限り複数の職員で担当させることにより、相互に相談したり補完したりできるようにした。前任の三澤庸助校長より引き継いだ、「学力向上」と「生徒指導」の二つのプロジェクトを車の両輪のように機能させる「プロジェクト2010」も成果を上げながら予定の三力年を終了し、平成25年度の新たな取り組みに向けての計画を作成中である。

この度、生徒会での話し合いの結果、本年度の生徒会誌の統一テーマを「想」とすることになった。私の思いが少しずつ通じている証と、感謝している。

私の学校経営の工夫

佐野市立赤見中学校長　井　上　裕　一

今までの校長先生方の学校経営の基盤の上に、この一年間、新米校長として微力を尽くしてきました。自分なりの学校経営の工夫を二つほど述べます。

1　講話は校長の授業

「講話は校長の授業」という言葉を何かで読んだことがあります。私もこの言葉を念頭に講話をしています。この場合の「授業」は、生徒対象の授業という意味だけでなく、先生方にとっても、教え方・説明の仕方の「授業」になるように心がけています。

本校は、体育館にスクリーンが備え付けられているため、気軽にパワーポイントを使えるのも幸いでした。黒板代わりに使えますし、講話に必要な写真やキーワードを映し出すことができます。

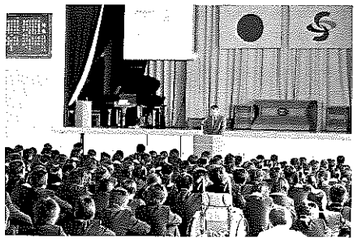
例えば、「創立記念日の講話」に、草創期の、生徒・保護者・先生みんなで校庭を作っている写真を投映し、最後に「先人の努力のうえに今がある」の言葉を映し出しました。また、保護者会では、相田みつをの「子どもへ一首。どのような道をどのように歩くとも、いのちいっぱいに生きればいいぞ」の書を映し出し、「親の願い」について話しました。講話の重要性と難しさを感じながら話しています。

2　指導力向上ミニ発表会

模擬授業形式で、各先生方が日頃の授業の工夫点を発表します。

号令生徒役の先生の「起立・礼」から始まって、発表者である先生が、実際の授業の一部を行います。日頃、小さい工夫を含め、さまざまな工夫を先生方はしてます。それをお互いが、実際に見る機会は少ないのではないでしょうか。ポイントを絞って、自分の授業の工夫を公開してお互いに学びあいます。例えば、「○○は何ですか？」という問いを発すると、生徒が挙手し「○○は……です。」という授業の問題点について、模擬授業の先生は「○○は何ですか？その答えを全員がノートに書きなさい。」という指導法によって具体的に改善策を示しました。

このミニ発表会で指導力の向上を目指しています。

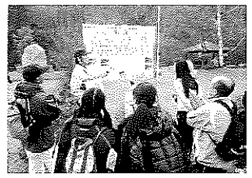


新任校長の一言

新任校長として

日光市立足尾中学校長　池　田　由美子

新任校長として赴任した足尾は、足尾銅山閉山とともに人口の減少と高齢化が進み、現在の足尾中学校は、生徒数26名という小規模校です。しかし、足尾に対する思いの強い地域の方々に支えられ、協力を得ながら、特色ある学校教育を展開し、生徒たちは、恵まれた自然の中で、明るくのびのびと学校生活を送っています。



今年度、日光市では、「日光市に生まれ育ったことに誇りをもって生きる子どもを育てる。」ことを目標に「日光みらい科」を開設しました。そのねらいに合わせ、足尾中学校でも、学校支援ボランティアコーディネーターを中心に、地域の方々、学校支援ボランティアの方々の力をお借りして、特色ある学校教育活動に取り組んでいます。

今年は特に、「自分の郷土をよく知る」ことを目的として、足尾の歴史に触れ、その中から生まれてきた伝統文化を学び、体験し、生徒たちは地域再発見に取り組んでいます。

卒業後は、進学も就職も他地区に出て行くことが多くなる生徒たちですが、離れても、自分の郷土を思い、大切にできる生徒を育てていきたいと思います。

また、足尾小学校との小中連携・一貫教育にも力を注ぎ、合同研修会等を実施することで、児童生徒の学力の向上、教職員の資質の向上が図れるよう努めています。今後もさらに連携を深め、小学校と中学校が一体となって児童生徒を育んでいきたいと思います。

小中連携が図りやすいという一方、９年間同一集団で生活していることから、コミュニケーション能力不足、競い合う気持ちに欠けることは否めません。そこで、今年は、他中学校との交流学習という新しい試みを取り入れることで、活性化を図っています。

今後も、諸先輩方の御指導をいただきながら、地域の方々、教職員同士、そして生徒たちと活気あふれる活動を展開するよう心がけていきたいと思っています。

新任校長として

真岡市立大内中学校長　古　郷　　学

本校は、真岡市の北部に位置し、東西10.6㎞、南北3.2㎞、面積33.85㎢東西に細長い地域です。

地域及び保護者の生活は、市西部に工業団地が造成されたこと等による就労場所の増加、都市化現象に伴い兼業農家の割合がかなり多くなってきました。学内全域が市街化調整区域で、新住民が入ってくる余地がほとんどないので、父母の両方またはどちらかが本校卒業生という家庭がほとんどであり、三世代家庭の割合も高く、教育熱心な地域です。

以上のような地域の実態を踏まえて、本年度の学校課題を「何事にも主体的に取り組み、自分の考えや思いを豊かに表現できる生徒の育成～各教科における言語活動の充実を通して～」と設定しました。

本校の生徒は素直でまじめであるが、やや主体性に欠ける面があると捉え、様々な教育活動を通して自分の考えや思いを生き生きと豊かに表現できる生徒の育成に取り組んできました。運動会や学校祭の合唱コンクールに全力で取り組む生徒の姿は保護者や地域の方々に感動を与え、生徒主体の生徒会活動などにも成果が表れてきています。

しかし、対人関係の不適応や発達課題が達成できないことなどにより、不登校の増加傾向が見られ、Ｑ－Ｕアンケート調査による実態把握、学級活動での話し合い活動や社会的スキルの習得を通して、コミュニケーション能力の育成を図ってきました。前年度に本校で行われた特別活動研修会における学級活動の公開授業では活発な話し合い活動が行われ、大きな成果を上げることができました。

そこで今年度は、各教科の授業の中での様々な言語活動を通して、相手の思いを受け止め、自分の考えや思いを豊かに表現できる生徒の育成を図ろうと実践に努めています。本年度から新教育課程が全面実施となり、言語活動が重視されていることからも本年度の学校課題が適切であると考えています。

新任校長として

矢板市立泉中学校長　小　嶋　照　彦

本校は、矢板駅から北北西約4.5㎞ほど離れた市北部に位置し、農村地帯ある。生徒数100名と規模は極めて小さい。

４月には校庭15本の桜が花満開となり、桃色の花びらに彩られた校舎は、高原山を背景としてとても美しい。花舞う中、登校する生徒が校門で立ち止まり校舎に一礼をする光景は、まさに「学舎」というに相応しい。生徒会が発案したこの登下校時の校舎への一礼は、よき伝統として先輩から後輩へと途絶えることなく引き継がれ、本校の特色である「全人教育」の基盤となっている。

現在、本校は、歩いて５分ほど南にある泉小学校と１小１中の「小中一貫教育」に取り組んでいる。これは、平成21年度泉地区４小学校を泉小学校に統合した際にスタートした。私はその前年の平成20年度に泉小学校へ新任教頭として赴任し、４年間の勤務を経て本年度本校に校長として赴任した。おかげで、生徒・保護者・地域がわかるという、たいへんありがたい環境で学校経営にあたることができている。

その小中一貫教育も、昨年で「基盤づくりの第１スパン」３年間を終え、今年度から「深化の第２スパン」３年間を開始した。「泉ブランドの確立～賢く・優しく・逞しく～」をスローガンとし、新スパンに向けて新たに企画・立案された数々の具体策が実践されている。その中でも、「ひとづくり・まちづくり・ものづくり・コトづくり」を４本柱とする探究的な活動を展開する「総合的な学習の時間」は、市の一大行事「ともなりまつり」を発表の場に設定し、市民に向けてメッセージを発信するなど本校の大きな特色となっている。

今後は、諸先輩・地域の方々の協力をいただきながら「生徒が輝く日本一の小規模校」をめざしたより質の高い「全人教育」を推進し、生徒に「自立した社会人としての基盤づくり」が培われる学校経営に努めていきたいと考えている。

新任校長として

大田原市立野崎中学校長　人　見　正　己

本校区は、大田原市の西部に位置し、箒川をへだてて矢板市に隣接しています。ＪＲ野崎駅を中心に発達し、国道４号線が地域の中心を南北に走り、重要な交通の拠点となつています。

本校は、地区の中心に位置し、２小学校からの児童が進学してきています。かつては箒川沿いに発達した純農村地帯でしたが、石上小学校区は工業団地化、薄葉小学校区は住宅団地化し、住民の意識や考え方も大きく変化しています。保護者や地域の方々の教育への関心は高く、協力的です。生徒は素直で誠実で、学習・運動ともよく行つています。

本年度の学校経営の方針に「ともに学び感動しあう」を、重点目標に ①「目指せ あいさつ日本一」運動の推進 ②「ありがとう」運動の推進 ③「プラス１を意識した感動を与える学校行事」の実践を掲げました。社会生活の基本としての「礼儀」、人間関係構築のために「感謝の心」、そして新たな自分の発見と成長を促す「挑戦する気持ち」を育てたいと考えています。そのためには、私たち教職員が一丸となつて教育活動に全力で励むことが大切です。そして、教師と生徒がともに汗を流し、新たな目標に向かつて挑戦し、困難を乗り越えることで感動は生まれると確信しています。

私にとりましては初めての大田原市内の勤務となります。これまでの伝統に加え、保護者、地域の願い、生徒の希望に応えることができるか、その責務の重みを感じています。諸先輩方のご指導をいただきながら、教職員同士、地域の方々との信頼関係のもと、よりよい学校作りをしていきたいと考えています。